

処世訓ではなく

今朝も、ルカによる福音書にのみ記されている特殊記事を取り上げて、福音書記者ルカの意図したところを浮かび上がらせつつ、福音の調べにご一緒に耳を傾けたいと願っています。

今朝ご一緒に読みました箇所にはふたつの「教訓」が記されています。新共同訳小見出しが「客と招待する者への教訓」となっていますので「教訓」といいましたが、こうまとめてしまってよいものか、教訓という言葉で聴いてしまうと、何かが損なわれるような気が少しするのです。これはわたしの感覚かもしれませんが、なにか教訓というと、わたしたちの人生に役に立つアドバイス程度というか、イエスさまが語られた教えは、わたしたちの生き方を変える神さまからの招きそのものと思いますので、わたしとしては教訓という手垢のついた言葉を、イエスさまの「教え」にあまり使いたくない思いがあります。そしてもうひとつ、今回の新共同訳聖書の14章7節以下の切り方は、たしかに15節以下の大宴会の譬えはマタイによる福音書にも同様の記事があるためにここでわけて、ルカだけの前二つの教えと分割したのはわかるのですが、内容的には、今朝、わたしたちが読んだこの7節から14節までのルカだけが記す特殊記事だけでは完結していません。というか、ルカが加えたこの彼だけの記事はいわばホップ、ステップにあたる部分であり、15節以下のジャンプの部分を際立たせるための前座、落語でいえばまくらのような箇所であることがわかります。このことは最後に触れさせて頂くことにして、まず最初のふたつの教えから見て行きましょう。まず第一の教えの語られた状況ですが、イエスさまは招待客が上席を選ぶ様子をご覧になって、譬えを話されたとあります。その結論は「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」というものです。自分で自分を高くした結果、第三者から、あなたより

ももっと優れた人がいますから下がってください、と言われて面目を失うというか、恥をかくというか。ここには実は複雑な社会関係があることが学者から指摘されています。聖書を読んでいるとやたらと食事の場面、それも会食の場面が多いことに気が付かないでしょうか。聖書には非常に多く宴会や、食事の場面が出てきます。イエスさまの活躍する場面や、たとえ話にも宴会、結婚式、盛大な披露宴といった場面設定が多いです。ファリサイ派の人々に食事と呼ばれたりする。今日の箇所でも、第一の譬えは結婚披露宴ですし、第二も宴会を開く場合です。さらに次の箇所は大宴会のたとえです。ここには現在の日本のわたしたちの家の事情ではこんなふうに人を読んで会食をするということは少ないでしょう。しかし、この時代、食事をともにすることはたんなる親しい人を呼んで楽しく過ごすということ以上の意味を持っていたのです。それはまず敵味方を識別し、社会的な棲み分けをはっきりさせる意味合いがありました。資格のないものは呼ばれないのです。身分が違う者も同席を許されないのです。だから7章にあったファリサイ派のシモンの家でイエスが食事をしているときに、その町に住む罪深い女がやってきて、イエスさまの足元に膝まづき、涙でその足を濡らし、髪の毛をほどいて拭い、香油を塗って接吻したという出来事は、本来、宴会の席に入るべき人物ではない者が入ってきた。この人も預言者なら自分に触れている女がどんな女か分かるはずだとシモンは思ったといえます。しかし、彼自身もイエス様から話を聞こうと思って招待したにも関わらず、足をすすぐ水も、接吻のあいさつも、香油のもてなしもなかった。非常に失礼な対応をしたということを指摘されます。こういう会食の場には厳格なルール、きまりごとがあるわけです。かつて社会主義の国などではどこに座っているかで、その集団における力関係がわかり、そういう分析がされていたことを思い出します。もう少し聖書全体をみわたして食卓の話をしませんが、

もともと神さまと人間の交わりの喜びが聖書では食卓の交わりとして現されることも多く、それは神の国そのものですからあるのです。「万軍の主はこの山で祝宴をひらき、すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉と選り抜きの酒」(イザヤ 25 章 6 節)、また新約聖書ではヨハネ黙示録の「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。誰かわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をするであろう」とあります。それから復活された主イエスは、弟子たちのまえで魚を食べてみせたという朝の食事の場面もありましたね。わたしたちのささげる礼拝も、この聖餐桌を中心に行われます。そこへ主がわたしたちを招いてくださるのです。主イエス・キリストが、わたしたちのテーブルマスターなのです。

さて譬え話本体に戻りますが、第一の教えは上座に座る者の高慢さを指摘し、「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と結ばれます。これが導入部、ホップの部分です。続いてイエスさまは、では宴会に誰を招くかということ、招いてくれた人に話されます。それは当時の宴会のルールからは遠く離れたものでした。宴会に招待する、あるいは招待される者になるということは、その社会的集団への入会の儀式にも等しいことでした。お互いの結びつきを確認するために招かれた者は、次の機会には招いてくれた者を招き返さなければなりません。こうなると誰に招待状を送るかというのはなかなか頭の痛い問題になってきます。こういう苦労は結婚披露宴などでテーブルに誰に座ってもらうか、花嫁花婿に近いところからどう座ってもらうかといったことで現代でも似た感覚を味わうことができるかもしれません。イエス様はここで大きく招待者のリストを書き換えられるのです。これまでの基準に従うのではない人々をリストに加えます。昼食や夕食の会をもよおすとき、友達や、兄弟や親類を呼ぶのではない。またお近づきになりたいと

近所の金持ちを呼ぶのでもない。むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさいといわれる。その理由がユニークで、彼らはお返しができないからだといわれる。その報いは正しい者たちが復活するときに報われるのだという。この教えは、わたしたちの目、わたしたちの思いをこの地上で完結しないところにつれてゆきます。コヘレトの言葉 11 章 1 節にも、あなたのパンを水に向かって流すがよい。月日がたってから、それを見出すだろう、という教えがあります。血の繋がりにや、土地のしきたりといったものが行動原理になりがちはわたしたちにむかって、与えられたものを、自分の領域のそとにいる人と分かち合うことの大切さをキリストは教えておられます。そこにあなたの隣人を見い出せということでしょう。そして、この勧めをバネにしてさらなる跳躍がきます。ジャンプの部分ですね。いまよみました 13 節の「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい」という言葉がすぐあとの大宴会の譬えの 21 節にそっくり繰り返されるのです。これが福音書記者ルカの工夫ですね。そして、ここに中心があるのです。大宴会の譬えは、神の国の食卓に与ることの出来る者はなんと幸いな人でしょう、と言ったのに対し、イエスさまが語られたものです。ある人が、これは神さまですが、盛大な晩餐会を開き、かねてから招待状を送っていた者たちに準備が出来ましたからおいでくださいと使いを送る。すると招待状を受け取っていた者たちはみな様々な理由を上げて断ったてしまうのです。結婚したばかりですので、とか。買ったばかりの家畜を見にいきますので、とか、この箇所をさして、ジョン・ウェスレーは「人は皆それぞれの事情によって滅んでいく」と言っています。理屈はつくのです、しかし、それが神の招きを断る理由になるのか、それぞれの理屈を振りかざして出来ない、やらない、参加しないと、神の招きを拒んでしまう。福音書記者ルカはとくにこの点を指摘することが多いように思

います。それで主人が怒って下僕たちに命じるのです。急いで、町の広場や、路地に出て行き、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさいというのです。つまり、今日、わたしたちに与えられた聖書箇所を客を招待するホスト側に勧められたことがここでまさに実現している。大宴会を催す主人、繰り返しますがこれは神さまですが、神さまは、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招かれる方、それだけではなく、そうした人たちを呼んできましたがまだ余裕がありますといわれて、さらに、通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れてきて、この家をいっぱいにしてくれ、というのです。約束の民でありながら、神の国は近づいたと、わたくしどものところに来てくださった主イエスを拒む招待客イスラエル、彼らの代わりに新しく招かれる者たち、それこそ、福音書記者ルカの読者である当時の地中海世界の人々、わたしたちをもふくむ異邦人なのです。そして、社会的な弱者である女性や、病に苦しむ人、不自由な人など、周辺に置かれた者たちこそ、招かずにはおかない。神の途方もない気前の良さ、恵み深さがここで際立つ。憐れみ深い主の食卓に、なんの熱しもなく招かれるまさに思いがけない喜びを際立たせるために、ルカは「客と招待する者への教訓」を、この大宴会を催される招待者である神の前フリ、落語でいうとまくらの役割として置かれたことが分かるのです。そして、この憐れみ深い主の食卓で良い肉、古い酒、神にもてなされる食卓につらなる喜びから、あなたはどのように生きるか、あなたの食卓には誰が招かれているか、あなたの喜びを多くの人と分かち合いなさいという、救われたことへの感謝の応答の道へと、わたしたちを招いているのです。

お祈りいたします。